三

店に戻った由蔵は旦那の吉右衛門に報告に行った。

磐音はおこんに誘われて台所に入った。

今津屋の大勢の奉公人たちが膳を並べる板の間は広々していて、女子衆が忙しく立ち働いて、いつも温かな湯気が立っていた。お茶でも食べ物でもすぐに出てくる。

磐音にとってなんともありがたい場所だ。

夕餉のために調理されていた雑煮をおこんが椀に出してくれた。

鶏肉と三つ葉と竹輪が彩りよく添えてあった。

「坂崎様、加賀屋様の惨劇を見てこられたというのによく食べられますな」

と呆れた顔をした。

「頭と腹は別物にございますが、できるだけ思い出さないようにしています」

由蔵におこんが茶を出した。

「南町の笹塚様は正月早々大変でございますな」

「加賀屋どのの一件だけではないのです。近くの旗本寄合の奥方が茶木稲荷で首吊りをしたとか。笹塚様はそちらも内々に調べてくれと用人から頼まれているそうです」

「寄合なれば三千石以上の大身、どちら様にございますかな」

「高力様と申されたかな」

「待ってくださいな。高力様と申せば、亡くなられた先代はやはり能楽師観世様のご門下でしたな」

「こちらの先代と同じところで習われたのでございますか」

「私が小僧時分に旦那様の供で四谷御門近くまでお供しましたから、よく覚えています」

「ということは、加賀屋どのとも昵懇ということになりますか」

「当代はどうか知りませんが、先代同士のお付き合いがあったことは確かです」

磐音は高力染野の首吊りと加賀屋の押し込みに繋がりがあるのかないのか気になった。

「先代の知り合い二家に災難が降りかかるなんて、嫌な感じですよ。うちも気をつけねばなりませんな」

と由蔵が言ったとき、磐音は立ち上がっていた。

「笹塚様にお会いしてきます」

由蔵がようやく気がついたように、

「二つに繋がりがございますので」

と訊いた。

「念のためです。正月早々に南町は苦労しているのですから、なんでも手がかりはあったほうがよいかと思います」

由蔵が頷き、

「坂崎様、南町に行かれるのはよろしいが、帰りにはぜひともうちに戻って来てくださいよ」

と夜の用心棒を頼んだ。

南町奉行所の年番方由りの笹塚孫一は、磐音の話を聞くと、くそっ、と吐き捨てた。

「先ほど高力家の用人が姿を見せて、染野の首吊りは病を気にしてのことと判明した。探索依頼の一件は忘れてくれと、銭を置いて行きやがったばかりだ。そんな関わりがあったとなると話が違うぜ」

笹塚孫一はすぐさま二人の同心を御用部屋に呼んだ。

一人は磐音も顔見知りの定廻り同心の木下一郎太だ。一郎太は磐音の顔を見て、ぺこりと頭を下げた。もう一人は老練な同心で顔には見覚えがあったが、名前までは知らなかった。

笹塚は磐音に、

「この者、歌垣彦兵衛と申してな、臨時廻り同心を務めておる。今後ともよしなにな」

と紹介した。

「よしなに」

と歌垣も磐音も頭を下げ合った。

「歌垣、一郎太、鰻割きの旦那がおもしろいことを知らせに来てくれたぜ」

と前置きして、加賀屋と高力家の関わりを告げた。

「今も付き合いがあるのかどうか、染野が加賀屋を訪ねた形跡はあるかどうか、急ぎ調べよ」

と二人の同心に命じた。

「早速……」

二人の同心が部屋から出て行くと、

「加賀屋から盗まれた金は、千五百両はくだらないことが分かった。それに商売物の道具がだいぶ盗まれておる。押し込みの野郎どもは、御堀に船を浮かべて堀伝いに逃げたと思われる」

と言った。

「加賀屋で盗んだ金箔漆塗りの提げ重などを江戸で処分する気ですか」

「それならばすぐにも足がつこう。おそらく上方に運んで売り捌くのではと考えておる」

「一味の中に商いに詳しい者が混じっているということですか」

「頭分は町人かもしれぬぞ。ともかく野郎どもが江戸を離れぬうちになんとか捕縛したいものだ」

と笹塚孫一は無精髭がまばらに生えた顎を撫でた。

磐音が今津屋に戻ったとき、六つ半を過ぎていた。

板の間では住み込みの奉公人が膳を並べて夕餉の最中だ。正月というので酒も出ていた。おこんが、

「奥座敷には、分家の方々も見えています。そちらに膳を運びましょうか」

と主一家らと席を共にするかと訊いた。

「皆さんと一緒にしていただきたい。気が楽で良い」

と磐音が言ったとき、奥座敷で挨拶を済ませた由蔵が台所に姿を見せた。

磐音と由蔵は奉公人たちから少し離れた火鉢のそばに向き合って座った。神棚の下は老分の席である。

おこんがすぐに熱燗を運んできた。

「まずは一献」

おこんに銚子を差されて二人は杯を満たした。

「旦那様とお話しましたが、染野様の実家は加賀様のご家来だそうにございます。となると染野様が加賀屋様と繋がりがあっても不思議はないかもしれませんな」

磐音は頷いた。だが、二つの家の悲劇に関わることだ、それ以上のことは何も言えなかった。

二人は、おこんに酒を促されてゆっくりと呑んだ。

その夜、磐音は今津屋の階段下の狭い部屋に寝た。万が一のことを考えての用心棒稼業だった。

正月三日の朝も無事に明けた。

今津屋は年始参りの客でごった返すことになる。そんなところに磐音がいても邪魔になるばかりだ。一旦、深川六間堀の金兵衛長屋に戻ることにした。

おこんが磐音に父親への土産を頼んだ。今津屋には大名家から年始に留守居役がやってくる。その客たちが御国土産を持参してくるのだ。

おこんは年末年始と深川に帰る暇がなくて、旦那の吉右衛門や由蔵に、

「金兵衛さんに持っておいで」

と言われた品々を届けられずにいたのだ。

風呂敷に包まれた品を手に提げて、両国橋を渡った。

いつもは忙しく往来する荷足舟、猪牙舟、屋根船の姿もなく、川向うで子供たちが上げる凧が、すっきりと晴れた空に二つ三つ浮かんでいた。

橋を渡りきった両国東広小路はすでに年始参りの主や番頭たちが小僧を供に行き交い、見世物小屋も店開きの準備をしていた。

「坂崎様、近頃はお見限りでございますな」

と人込みから声がかかった。

振り向くと矢場「金的銀的」の主の朝次が笑っていた。

「親方、おめでとうござる。今年もよろしく頼みます」

「こちらこそお願い申します」

矢場荒らしが出回った折りに磐音は、用心棒に雇われたことがあった。

「大荷物ですな」

朝次は磐音が手に提げた風呂敷包みに目を止めた。

「今津屋のおこんさんからの頼まれものです」

「この刻限に橋を渡るとなると、正月早々に仕事のようですな」

「用心棒稼業に正月も盆もありませんからな」

「まあ、お互い様だ」

「親方、なんぞございましたら、金兵衛長屋にお知らせくだされ。いつでも駆けつけますぞ」

「坂崎さんの腕をしばし煩わすようじゃあ、こっちの商売は上がったりだ」

笑い合った二人は人込みの中で別れた。

六間堀まで来るとどてらの金兵衛が首に綿を入れた布を巻きつけて、柳の木の下で朝の光にきらきらと光る水面を見詰めていた。深川の町並みもどことなくのんびりして正月の時間が流れていた。

「大家どの、おこんさんから預かり物です」

振り向いた金兵衛が、

「浪々の身とはいえ、お侍さんに頼み物などしやがって申し訳ありませんな」

と娘の行為を謝った。

「なんの、ついでのことです」

磐音は金兵衛の家まで風呂敷包みを運んでいった。

「いつ帰ってくるふうでしたかな」

「松の内のなんとか顔を見せるからとの言付けでした」

「今津屋に嫁にやったようだぜ」

とぼやいた金兵衛は、お茶でも飲んでいかないかと誘った。

「朝餉をご馳走になったばかりです。長屋に風を入れて、宮戸川の親方のところに年始に行かねばなりません。いずれまた」

磐音はそう断ると長屋に戻った。すると奉行所の小者が磐音の長屋の前でうろうろしていた。

「何ぞ用か」

小者がほっとしたような顔を振り向き、

「今津屋様でお長屋に戻られたと聞き、こちらに駆けつけたところにございます」

「なんぞ起こったか」

「笹塚様の使いです。坂崎様、お暇なればご足労をと申されております」

と言った。

宮戸川への年始参りはまたにせねばならぬかと思いながら、磐音は長屋の戸も触ることなく木戸口に引き返した。

小者が磐音を案内したのは、渋谷川の河畔、広尾原だ。

四谷大木戸の水番所で玉川上水の水を分流して、南に流し、渋谷村を経て麻布へと通過させた。

この川を渋谷川という。だが、渋谷川は下流に行って、細かく古川、赤羽川、新堀川、さらに金杉川と名を変えつつ、江戸の海へと流れこむ。

広尾では古川と称される渋谷川のほとりは、蘆が生えて四季折々には野趣あふれる情景を見せてくれた。

そこで茶店などができて、江戸の遊客を迎えていた。

笹塚孫一が待っていたのは水車橋際お茶店で、正月に吟行に来る趣味人などに茶や酒を供していた。

「おおっ、参ったか」

春めいた色の小袖に羽織の笹塚は、脇差一本を腰に差し、どこぞの若隠居がふらりと野遊びにきたようだ。

そんな格好で笹塚は酒を飲んでいた。

「まあ、一献」

磐音を傍らに座らせて笹塚は杯を差し出した。

江戸の半分ほどを歩いてきた気分の磐音の喉に、少し温めの酒が美味しかった。

「高力染野だがな、眼病を患って、ほれ、真向かいに見える祥雲寺の離れで療養していたそうな。その折りに退屈を紛らわすためにこの界隈の茶屋に来ては、食事や時に酒を飲んでいたらしい」

といきなり笹塚が説明を始めた。

「染野様はおいくつにございますな」

「二十八だ。大年増だがなかなかの美形だ。それにほれ、目を患った女には格別の色気があるというではないか。茶屋に出入りしておる折りに、増上寺別院の寺侍の鈴木香志郎と知り合いになあった。こっちは年下の二十三歳だそうな。まあ、悪侍の手練手管に引っかかったのさ」

磐音は事情がはっきりしないまま相槌を打った。

笹塚が空の杯に酒を注いだ。

「恐縮にございます」

と答えた磐音は、

「鈴木香志郎は、加賀屋に押し入った強盗の一味にございますな」

と訊いた。すると小さく頷いた笹塚が、

「その前に説明すべきことがあったな」

と前置きした。

「そなたがもたらしてくれた高力家と加賀屋の繋がりだが、確かに今津屋の先代を含めて、三人は能楽師観世長春の弟子ゆえ、付き合いがあった。だが、今津屋の当代は謠に趣味がないこともあって、交際は途切れた。しかし、高力家と加賀屋の付き合いは屋敷と店が近いこともあって続いていた。とくに染野を高力主税の嫁にと口利きをしたのは、大名や旗本諸家に出入りする加賀屋の先代であったそうな」

笹塚は、杯に残っていた酒をゆっくりと舐めた。

「さて、話を戻そうか。寺侍の鈴木香志郎は、おそらく染野に狙いをつけて接近したのであろう。高力主税様は、染野と年が十三に離れておられる。それにどうやら糖尿の気があって、長男がお生まれになった後は、閨房から遠ざかっておられる様子なのだ。香志郎がそのような染野を恋狂いに追い込むのはさほど難しいことではあるまい」

さすがに南町奉行所の頭脳と呼ばれる知恵者だ。木下一郎太らを指揮して、旗本家の内緒事まで探りだしていた。

「染野様を騙して、元旦未明の加賀屋のとを開けさせたのが鈴木香志郎にございますか」

「まずそう推量して間違いなかろう。染野は仕事をさせられた後、首吊りに見せかけて始末されたのさ」

「一味はいかがで」

「広尾原の百姓家に一年前から浪人たちが三人ほど住み暮らしてきた。そこへ鈴木香志郎も出入りして、天気がよいと庭先で剣術の稽古をしていたようだ。浪人三人の頭分は、元泉州岸和田藩家臣と自称する高馬道平、こやつは四十年配だそうだが、太子流の剣の達人だそうじゃ。ついでにいうと、鈴木香志郎は、新陰流の遣い手だ。後の二人は、磯崎、桂間としか分からぬ」

「この者たち四人の頭分は判明しましたか」

磐音は加賀屋の座敷に残されていた、右足を引きずるような血の足跡を思い出しながら訊いた。

「こやつ、そなたが推測したとおりに商人風の町人で、右足が不自由と見えて杖をついておる。一、二度、この界隈で見かけられているが、名前も顔も未だ判然とせぬ。だが、高馬らの態度を見ても、この商人が一味の首魁と見て相違なかろう」

「首魁の身元も割り出せぬというのに、南の知恵者与力様にしてはのんびり構えておられますね」

悠然と答えた笹塚の言葉の背後に自信を感じた磐音が訊いてみた。

「そなた、年寄り猫のように悠長を装っているが油断できぬな」

と笑った笹塚は、

「六年も前、同じような事件がこの江戸であった。首魁の名は、おっとりの百兵衛というがなかなかの凄腕だ。仕事を働くときだけ手下を集めて、二つ、三つ一気に仕事を終えたら、手下を解き放って時分は何年もどこぞに消える。このおっとりの百兵衛の手口に加賀屋の一件は似ておる。だがな、それがしの知りうる百兵衛は足が不自由ではない。じゃが、この六年の間になんぞ百兵衛の身にあったとも考えられる」

笹塚孫一が鷹揚に構えているのは、おっとりの百兵衛に対抗してのことか。

「ともかく百兵衛なら、加賀屋のほかにも御膳立てをしているはずだ」

と笹塚が言い切った。

「高馬道平は百姓屋に戻っておりませぬか」

笹塚ののんびりぶりは、そうとしか考えられなかった。

「いや、高馬ら三人の浪人はおる」

笹塚が行った。

「高馬らが戻ってきたのは、元日の夕刻前のことじゃそうな。加賀屋を襲い、御堀に待機させていた船で逃げたあと、どこぞに立ち寄って盗んだ金と盗品を隠し、広尾原に戻って来たとすれば、符丁も合う。だが、鈴木香志郎は未だ増上寺別院に戻っておらぬ」

「笹塚様は、首魁のおっとり百兵衛と鈴木香志郎が顔を揃えたところで一網打尽なさる気ですか」

「百兵衛が広尾原に舞い戻ってくるどうかはわからぬ。だが、高馬らの悠長な暮らしぶりをみていると、なにかを待っているような気もする。江戸市中の隠れ家が分からぬ以上、ここに網を張るしかあるまい」

「高馬らを捕らえて、問い質すという方策もございます」

「そなたらしくもない短兵急な策だな」

笹塚が笑った。

「まあ、その手も考えられぬこともない。が、しばらく粘ることが先決だ」

「それがしはなんのために呼ばれたのですか」

「太子流の高馬、新陰流の鈴木香志郎と腕利きが揃っては、南町の陣容だけでは心許ないでな」

「それがし、夜には今津屋に戻れねばなりませぬ」

「こやつらが動かぬ以上、今津屋に押し入る者は差し当たってあるまい」

「ならば、今津屋どのにそのことをお知らせせねばなりませぬ」

「そのことなれば心配無用、そなたを呼びにやった小者に手紙を持たせた。今津屋は承知だ」

笹塚孫一は平然と言った。

「まあ、まだ正月も三日じゃぞ。あくせくいたさずに飲め」

笹塚は銚子を差し上げたが、

「おや、空か」

と呟き、店の奥に向かって、

「酒を頼む」

と叫んだ。